繪本直指寶　三

750
T2

繪本直指寶巻之三目録

文翁之像　韓退之像
常山蛇勢之圖　王羲之像
李太白見瀑之圖　張仲景之像
朱丹渓之像　花佗醫法を受る圖
蔡邕筆法を授る圖　滕王閣序紀事
顧愷之丹青　蔡倫紙を製する圖

張僧繇畫竜図　墨竹之濫觴

笠翁山水を習ふ図

文翁 本朝南殿の障子に画がく聖賢卅二人乃内なり

文翁は前漢の景帝の代の人なり学問に志厚く春秋経乃義理に通ぜり蜀郡乃守となりて仁愛をもつて民を撫し刑罰を省て善教を施すされども蜀ハ都より遠く南蛮西戎の風俗あるを敷き上疏して蜀都の中に学校を建て弟子を集め聖賢の道を教ゆ後武帝の代に天下郡国に学校を建させられしも文翁乃善教によつて也蜀人小社を建て文翁乃霊祠また存せりといへり

師説　韓退之

古之學者必有師師者所以傳道受業解惑也人非生而知之者孰無惑惑而不從師其為惑也終不解矣生乎吾前其聞道也固先乎吾吾從而師之生乎吾後其聞道也亦先乎吾吾從而師之吾師道也夫庸知其年之先後生於吾乎是故無貴無賤無長無少道之所存師之所存也畧○又曰孔子曰三人行則必有我師故弟子不必不如師師不必賢於弟子聞道有先後術業有專攻如斯而已李氏子蟠年十七好古文六藝經傳皆通習之不拘於時請學於余余嘉其能行古道作師説貽之○柳子厚答韋中立書云今之世不聞有師獨韓愈不顧流俗犯笑侮收召後学作師説因抗顔為師愈是以得狂名余觀退之師説云弟子不必不如師師不必賢於弟子其言非好為人師者也下畧

韓愈字退之唐憲宗臣也孟子以後中興之大儒文章の達人ゆゑ学者崇敬すること北斗を仰ぐがごとし

柳子厚の曰韓愈が文勢たとへば常山の蛇勢のごとしかしらをうてば尾とぞこれをまとひ尾をうてばかしら来てたとへば中ごろをうてば首尾一度に来て是をまとふ

常山の蛇勢を圖 常山ハ陣す

昔より畫く所の形龍の形にして蛇の形にあらず蛇といふハいのちを角もなく足もなし然れども其勢を
いふ時ハ龍の勢といふべし然れバ用ゆる所ハ龍の威をかるなり蓋し兵家文字の常に用ゆる
所は軍家にも用ひらるゝにてかの孫子の言に用ひられしものをあげきたりいふものなり

晋乃王羲之

晋の王羲之字ハ逸少王曠が子なり幼少の比より聰明にして書
を能し人に崇挙せられ成長して文筆をたしなむも草書におゐてとほく
古今能書の第一と称され其人となり人に越たるを監て郗鑒女
を妻合て婿とす朝廷に仕て右軍将軍会稽の内史に到る永和九
年暮春の初山陰の蘭亭に禊事に当時の群賢畢く到り少
長咸く集る此地に崇山峻嶺茂林修竹あり又清流激湍ありて
左右に映帯を引曲水の宴となす文人詩人四十餘人ひとつも水に
そふて坐に水上より觴を流せば其人その前に来らざる内に詩一首
を作りてその觴をとつて酒を飲色紙をとれども詩未だならざる人へ
ひとしく觴を通すとなりされを曲水の宴と名付て周の代より
始まり此日の事を王羲之文に作り自書して蘭亭記
とゐふ古文後集に載たり

唐乃李太白いとけなき時より才智人に勝れ長て詩文に名を顕はし
玄宗皇帝の寵を得たり性酒を好ミて飲ずる事なし よつて酔仙乃
名あり今詠ずる所ハ李白廬山の瀑布を見て詩を賦せし体なり或説に
李白三十歳の時明月乃夜舟より水に没て卒すといへり此図に童
子の腰を抱へたるハ老衰のゆへにあらず天下第一の高陽にて騒海
業とも見えたる事なる人なれハ毎く沈酒行れる体を画を為なり

朱丹渓

張仲景 漢の長沙乃太守 字ハ仲景 南陽の人なり 農黄の学に明らかにして 醫中の英傑也 嘗て神農本経及び傷寒論を著す 今に至て醫を説もの仲景を以て徴證とす

朱丹渓

元の代の名医今華府の人なり姓は朱氏諱は震亨字は
彦脩といふ学て許謙を師として儒学に精し三十歳の時母の病
重かりければ諸医手を束て治療を施すものなし是れより
丹渓医道に志ふかく其比武林に羅太無といふ名医を師として
て素難の奥旨を極め起死回生の妙手を顕し勝て算ふべからず
丹渓熟往年我親戚数人の病死せるを追念するに皆当時世に著る
庸医和剤局方と云方書を信じ一概に燥熱温補の
剤を濫に用ひしゆへなれば此後天下の人に此等の害あらん
事を恐れて局方発揮及び格致余論本草衍義補
遺風水問答等の書を著作せられ今に伝へて世にあり
劉張李朱とて中古医門の四大家と称せらる一人なり

華佗異人に医法を受

華佗は後漢の名医なり農黄の学に明らかにして養生
の術に長ぜり或時薬を採らんとて深山に入路に踏迷ふて
帰路を忘れ茫然たる所に異相の人来り華佗に向て曰
我汝を待つ久し汝が命を済んが為に薬を求て爰に
来る医は仁術なり司命の職にて重任なり汝志誠なり
によつて一巻の秘書を授ると忽ち消失ぬそれより其術
神の如し魏の曹操頭の病を患へ華佗をまねきて
治を請ふ佗が曰君の病深し頭を破り洗て後に治
せずんば愈がたしといへば曹操大に怒り敵国の間者と
思ひ疑ひ縛て獄屋へ下し殺害あり異人より授し青嚢
の秘書は獄司の妻携へ失ひけるとぞ

蔡邕嵩山の神人に筆法を授かる

後漢の蔡邕字ハ伯喈陳留の人なり官ハ左中郎将にいたる初嵩山に入書を石室の中に学ぶ素書八冊を得て誦読すること三年にして遂に其理を通ず嘗て石室に於て神人に遇て筆法を授かりけり

永字の八法を傳ふ

神人授筆法曰
書肇於自然自然既立陰陽生焉陰陽既生形勢氣載矣藏頭護尾力在字中下筆用力肌膚之麗故曰勢来不可止勢去不可遏書有二法一曰疾二曰遅渋得疾遅渋二法書妙盡矣神人授蔡中郎無行紙筆縦口談畢而去蔡中郎聴計於心随書於紙後轉

書の道も書に同し疾遅渋法湯或ハ正鋒偏筆を用ひ設ハ筆道乃文をかり畫乃の後に写て並りかゝる事をのなり

王勃滕王閣序紀事
唐高祖子元嬰為洪州刺史置此閣時封滕王故曰滕王閣咸亨二年閣伯嶼為洪州牧大宴于此宿命其壻為序以誇客因出紙筆徧請客莫敢當勃在席最少受之不辞都督怒遣吏伺其文輙報一再報語益奇乃矍然曰天才也請遂成文極歡而罷勃字子安少有逸才高宗召為博士因作闘鶏檄文高宗怒謂有交搆之漸乃黜後到父任所省待道過鍾離九月九日會此而作此序

序ハ古文後集に載せり王勃十三歳にして才力元人に卓越せり此序を作る時ハ十三歳の名誉とて其文章驚きゆへここに略文乃中に曰落霞與孤鶩斉飛秋水共長天一色と云ふ撰ありこの二句を画にあるなり

滕王高閣臨江渚　佩玉鳴鑾罷歌舞
畫棟朝飛南浦雲　朱簾暮捲西山雨
閑雲潭影日悠々　物換星移度幾秋
閣中帝子今何在　檻外長江空自流

共長天一色
滕王閣圖

落霞與孤鶩齊飛秋水

顧愷之

顧愷之丹青

晋の顧愷之字ハ長康博学にして智恵あり絵を好みて甚妙をつくせり古今独歩にして性痴虚にして毎常に戯言をいひて身を守らず初め桓温が官府に参りし長康年比画し絵の中にて勝れたるを撰んで一つの匱に入て秘蔵しを或時桓玄に所望あり心のせくまゝに匱を前斗封じて桓温が子の桓玄に預て出しけり桓玄匱の後に封のまゝを見て内成絵を悉く盗とりなりぬ日の後長康府に帰り桓玄に匱を乞ふ桓玄件の匱を出し預りしより大切に側を去ず封のまゝ帰へすと云長康封を見て悦び蓋をひらきみるに絵一枚もなし大に感じ曰る侍ふて我絵ハ玄妙不測の筆なる故也神異に通じ変化して飛行さうといひて少しも疑乱色なし此時疑惑の一言をいはざれバ桓温が悪を知して我身に禍あらん事を察し己が自慢とりながら却してる後小散騎常侍の官にいたるとぞ又丹青といふ事ハ流に和漢畫家傳説に詳るが故に今茲小贅せず

繪ハ染糸ノ色繍ニヨル故ニ糸ニ會スル意アリ繪ニ五采アリ五色ヲタテコレヲ変ス

青ハ　天色
易ニ八天ヲ金トス一金乾天ト云黄金ニ名ヲ又ニ光金風白銀ニタトフ金ハ土中ニ生スルユヘニ黄色ナレ圧ソノ真ハ青シ金ヲ薄クノベ泊トナシ日光ニスカシミレハ黄金反テ青色ナリ真ノ色青キユヘニ蒼天ノ色トストモ云ヘリ

黄ハ　地色
天地ノ色交テ緑ヲ生ス草木葉ノ色
○緑ハ五色ノ外ナリシカレ圧アヲキ色トクロキ色上ニキヲハレキヿアリユヘニアヲキヲキヲノゾキモエキ色ヲカエ用ルヿヲシレ
○或ハ木火土金水ト云時ハモエギヲ木ノ色トス

赤ハ　火色
黄赤白交人物面色

白ハ　金色
金五色アリ　黄ナル　キン　アカヽネ　赤ガネ　シロガネ　ギン　クロガネ　テツ　ミガケハクロカネモシロシ　皆五行色ヲカレ圧

黒ハ　水色
水ハ五行ヲ助ク書畫万物ヲ分チ記ス皆墨ノ功ナリ

青　藍汁
大青　白青　緑青　白緑青　大繪具ト云
墨畫山水遠山水色ニ加ヘ用
浅碧　アサギ色

黄　黄土　藤黄　石黄
合　草汁モエギ色
合　淡黄ウスクチ色
墨畫ノツル　ニワトリ　キジ　カシラノアカミニ朱ヲ用

赤　丹砂　朱砂　生臙脂
合　紫
紫藤色

白　胡粉
合　草木花色　ウスイロ
肉色

黒　墨
合　木ノ色　灰色
玄色　松杉色　栗色ニ用
雲霧風雨雪月山水草木人物屋形禽獣天地万物ニ用
トリノケダモノニタテニ用

朱墨
合朱　墨ニ云　黄土ノ上ハ朱　墨ニテ　シタテル法也

今朱墨の三色ハ墨に白用を極まれて要ハ山水人物など墨一色と濃淡に而画ハ加へ用ゆべく墨画の事われハなく今朱を雑用ゆるとあれ丹胡粉黄の汁と云雑○濃黄土胡粉草の汁とかく伝ハつまいまをさ云時ハ臙脂も加へ用ゆ又是花き見のらハ紅花能なし代よむべきこと○又云の具ヶ名胡粉を合せさんまぐと申さん事さと云是よりまんろく白ろくせうなど加へさんまぐ有り今ハ色乃作さなり万色に加へ用ゆ今泥を金ずり人物乃衣紋本の茶目或て目表の差乃冬名づけ置きれ色多のるいの毛がきさ山水金紋作さあしきを今にて切也

蔡倫紙を造る

上古ハ今のごとく紙といふ物なし書ハ竹を削て青を殺て字を彫て牛の革にて編て是を汗青といふ故に簡策等の字皆竹に従ふ秦漢の間に至て縑巾をもつて書をしるしこれを幡紙といふよつて紙の字糸に従ひ或ハ巾にしたがふ氏に従ふハ諧声也劉熙が釈名に曰紙ハ砥也其平かなる事砥のごとし東漢の和帝元興元年桂陽の蔡倫といふ人工夫して樹の皮を製して紙を造る又帛魚網麻緒の類を煮擣て紙を造るといふこれより天下に周く通じ用ゆ蘇易簡が紙の譜に云蜀の人ハ麻をもつて閩の人ハ嫩竹を用ひ楮皮をもつて呉の人ハ繭紙を作ると是今日本なり

漉ぶねを長さ丈尺
幅二尺余なる
ものあり又古ハ
大紙を漉
を長さ一丈幅
ニ丈に余り
藤をもつてほし
うすみ蒲も
紅葉紙
あり

梁の武帝の臣ん右将軍
呉興の太守となる丹青を
よくして名誉を時に発はう
武帝釈氏をたつとひ多く
仏像を画しむ故に浮図の
像多しとくに武帝墨絵乃
龍を画がき睛を点じければ
即ちうごいて墨雲紙面より
ひるがへり起り須臾のあいだに
室中にとびこう雷霹靂
去て終として墨絵の龍
たちまち脱出て
飛去るとなん画竜点睛
ぬけ出るといへるも類
是等のことなりけん我朝
にても金岡が画ける馬の絵
野の草を食ひしと書
伝へ又かの五郎大夫が画きし
まも英将の画の飛
ども何の経に事もあらん

墨竹を画濫觴

むかし蜀の国に宦氏といふ者の女に李氏といへるあり其容兒美麗のみならず文を著し書画に工なり郭崇韜といふ者蜀を伐て此女を得て寵愛に李夫人と崇韜が粗勇とのみ事としてその心をも志れを慕て楽しまず或月の夕独欄干によりてうそむき居けるが折ふし清なる月の光東窓に障子を照して竹の影うつり寛風情ありけるに此人模写にして翌日是を見るに生気自然にそなはれり是より墨画の三昧に悟入せりとぞ或人の云後宋代文与可も此李夫人の竹影の画を学て妙を得たり又蘇東坡は文与可を師として此術を得て後世まで墨竹の名誉を播せりと称へ俗に絵をかく法師といふも竹影の故事よりいへる拙ならん然ありても山水草木禽獣鱗魚の数品形ありと謂て可ならんや遠山を樹き人などを画には其を眺望を見て勝に見ゆる景色を画といへどもその筆勢気韻の

あり唯墨竹のみ影法師といふ名ありて生人は生の竹葉より墨竹の葉は一際よく似たりて一切の草花みても灯火にうつして又は月日の影よりうつるは生よりも長く見ゆるものなり

笠翁山水を画く

清の康熙年中に湖水の上に李漁といふ人あり常に名山を好んで奇水の意を逍遥し遊芸俗の交りを嫌厭ひ自ら笠翁と号して心を表外に楽ましむ常に経歴せる所の名山奇蹟の絶景を画きはしたりと云へども名師の作をよくして心のまゝに書得る事能はざれば嘆闕うして止み其後病によりて出る事能はず扨あさましきは古人の画く所山水の画軸をひらきて心を慰めば湖水の山月さながら所床の前にありて崑崙黄河も我家の内に出現をまことの山水を見るに異なる事なしとて画

道乃法なりとそれよりはやく畫に志て給はし深
かりける於藝小園伯といふ人あり其原晋玄長康が流
ゆゑ山水に名を得し畫師なりき猶も行て師
に就まんと園伯が草廬に到りゆえんを述て弟子と
園伯逆へ見て云貴客何乃為にか我茅屋に
来りなるや李漁が曰それがし畫道にこゝろざしふかく
常に經歴する所乃山水を見る毎に写さまく欲すると
いへども其景色目中に得へ筆頭に出れば終に画す
あたはず獨りと恨とし先生畫道に高名なるを慕
ひ来りて教をこふ様がつく志て山水の法を伝へ給へば
何の幸か是に志かん伯が曰 大抵画法相伝へ久しく私
をごとも山水乃一途其伝あり 蓋し山水乃家を
立て作為の法をあり 作人がすし畫家のかく

秘とは右なり画乃意の切なる事を照さんとて地下あり
とて秘巻の書を出し画法乃書を熟しぬ能く得る事
得をば常に眼中に貯ふる事忽焉としぬ筆下に出
應し是古人の集る所の秘事なり我今浅乃蒂み
園に居せし時王子安節書を読乃いとゐ數をぬち
部に成立しぬ其に帰す今画の心深切なるゆへ
傳ふる所なりゆゑく縁畧りある絵事ゐ云らしす
別集る所山水木石花泉流水人物の諸氏をそる山高
低先後墨色乃濃淡を用ひて配合擦秋をなへて三
百餘圓なり珠り画家者流乃口訣荅奥で總括
を足下よく此事を熟するとそれハ有傳あり又ハ万里を合し此の
言説を論するに於て豈泄あらん中しやハ李漁報謝して論る